

観音堂遺跡は、15 万 m^2 以上の面積を有する岩手県内有数の大きな縄文集落の一つです。遺構・遺物の保存状態は極めて良く、出土した大量の土器は北上川流域の縄文時代中期後半～後期前葉の土器変遷を知る上で大変貴重なものです。

観音堂遺跡が本格的に営まれたのは縄文時代中期後半（約4,500 年前）の時期からです。この時期の土器は、立体的な渦巻文・蕨状文や、磨消または充填した縄文によるI字形・H字形の文様が特徴的な土器群です。次の時期の土器群は、横S字状文・C字状文・J字状文などアルファベットのような磨消または充填による縄文文様が主体となってきます。

縄文時代後期になると、口縁部を中心に粘土紐の貼付が多くなり、その上に刻みをつけたり、鎖状にするなど中期とは大きく文様構成が変わります。観音堂遺跡の最終時期である縄文時代後期前半の土器群は、磨消または充填縄文による渦巻文や直線区画文が特徴的です。これらは『観音堂式土器』とも呼ばれています。



第 29 号住居跡出土遺物 (1984 年調査)